

地域生態史の比較研究

1. 研究組織

研究代表者：市川 光雄（京都大学大学院人間・環境学研究科・教授）

研究分担者：荒木 茂（京都大学大学院人間・環境学研究科・助教授）

太田 至（京都大学大学院人間・環境学研究科・助教授）

重田 真義（京都大学大学院人間・環境学研究科・助教授）

嶋田 義仁（静岡大学人文学部・教授）

2. 研究のねらい・目的

近年、自然と人間の生態史、すなわち両者の相互作用の通時的変化に対する関心が高まっている。有史以来、さまざまな環境変遷を遂げてきたアフリカ大陸に関しても、これはとりわけ魅力的な研究テーマのひとつである。植民地化以降の植生変化や最近の環境変化は言うに及ばず、サハラを結ぶ交易ルートの消長や、10世紀以降サヘル地域に出現したいくつかの帝国の興亡、さらにはバントゥー・エクスパンションとして知られる民族の大規模な拡散などの歴史的な大事件も、地域の環境や生活の変化にかかわる生態史的な現象として理解できよう。

本研究では、このような観点から、人間活動と自然の相互作用の歴史としての地域の生態史を再構成し、地域の生態環境と固有文化の関係、それらと外文明との相互関係を検討する。また、主として熱帯アフリカの諸地域の景観や生業、国家形成等の生態史的な位置づけと相互の比較を通して、地域の特性を生態史的に把握するとともに、そのような生態史記述の単位としての「地域」概念の妥当性を検討する。

研究代表者及び分担者はいずれも、これまで長年にわたって生態人類学及び文化人類学的な現地調査に携わる一方で、東南アジアとアフリカの地域間比較や、衛星データ等を用いた新しい地域研究の方法論に関する検討を行ってきた。本研究では、従来の現地調査と文献研究に加えて、このような新しい方法による地域研究の開拓を試みる。

3. 平成8年度の研究経過

第1回研究会 平成8年5月23日（木）於：京都大学アフリカ地域研究資料センター

話題提供：Steven Brandt (University of Florida)

「エンセーテの起源：先史学と歴史学の視点から」

アフリカ地域研究資料センターの客員教授として来日したブランド博士を招いて、バショウ

科のエンセーテなどの栽培植物の起源及びそれにまつわる歴史、とくに更新世末期の1万8千年前から前世紀(19世紀)までの間の気候変動と、植生変化、人口増加、社会体制の進化などとの関連について話題提供をしてもらった。

第2回研究会 平成9年2月24日(月) 於: 京大会館

「ヒトの進化・石器・土器: 東アフリカにおける先史学と考古学」

話題提供:

諏訪 元(東京大学理学部)

「エチオピアにおける古人類調査: コンソ及びアワシュ中流域からの話題」

西田正規(筑波大学歴史人類系)

「後期石器時代のサバンナ狩猟採集社会の復元」

Simiyu Wandibba (University of Nairobi)

「土器に関する民族考古学: ケニアからの話題」

篠原 徹(国立歴史民俗博物館)

「エチオピア南部におけるコンソの土器の製作と機能」

総合討論 (司会: 太田 至)

コメンテータ: 渡辺 毅

スチュアート・ヘンリ

デビッド・スプレイグ

野林厚志

まず諏訪は、エチオピアでの最近の発掘調査から、目下のところ最古の化石人類とされている450万年前のラミダス猿人、およびコンソで最近発掘された原人化石について話題提供をおこなった。とくに、ラミダス猿人の生活環境が森林であったことを指摘し、従来の「人類サバンナ起源説」の再検討の可能性を示唆した。第2に西田は、タンザニア、セレンゲッティ国立公園での調査において、石器の空間的分布状態から後期石器時代人の移動や生活様式の復元を試みた。第3にワンディバは、現代の土器製作に関する資料を手がかりにして考古学的な土器文化を復元する際のさまざまな問題点について検討した。そして最後に、篠原は、エチオピアのコンソの農耕社会における土器の製作とその社会的機能について、織物の場合と比較しながら論じた。なお、この研究会は、アフリカ地域研究資料センターのシンポジウムを兼ねて、京大会館において行なわれたものである。

平成8年度には、これらの研究会及び研究集会のほかに、以下のような研究活動をおこなった。

市川は、後期石器時代に中央アフリカ一帯に広がった湖沼文化の発達や、同じ地域で発達し、ソルガムやトウジンビエなどの多くのアフリカ独自の作物を生んだスーダン型雑穀栽培農耕文化の起源について検討した。また、鉄器製作やバントゥー系農耕民の広範な移動と森林地帯への移住、アジア起源の作物の導入など、多くのアフリカ的な文化・社会の特徴が形成された後期先史時代に関する生態史的な検討をおこなった。

また、ザイール共和国、イトウリの森での現地調査の結果にもとづいて、(1)人間の食用となる植物には光がよくあたるところを好む二次林性のものが多いこと、(2)狩猟採集活動や農耕活動によってこうした二次林が森のあちこちに形成されていること、(3)キャンプや集落などの居住地には大量の食物や薪などが運び込まれ、それらが消費された後に灰や排泄物、ゴミなどの形で有機物やミネラルが蓄積されること、いいかえれば、人間の居住地が森の中で広い範囲に分散している有機物やミネラルを集中させる場所となっていること、(4)このように、光と土壌の条件が改善され、資源のリサイクルの場となる居住地(キャンプ地)の跡が人間の移動や移住によって、森の中のいたるところに残されていること、などを指摘した。そして、これらの移動や移住の跡を衛星画像から追跡することによって、人と森の相互作用に関する歴史生態学的なアプローチを試みるとともに、地上での人間活動に関するミクロな観察と衛星からみたそのマクロな俯瞰図を対照させて分析することを試みた。

荒木は、タンザニアのミオンボ疎開林を中心とした地域の土壌評価と土地分級、及び農耕システムを検討し、移動を伴う農耕活動や居住様式がこの地域の生態環境に及ぼした影響を、衛星データや航空写真と、地上での観察結果を対照させることによって解析した。

太田は、東部及び南部アフリカのサバンナ地帯の代表的な生業である牧畜について、その成立機構を人間と家畜の相互作用という観点から検討をおこなったほか、南部アフリカのナミビア共和国におけるエスノ・ヒストリーおよび民族間関係についての検討をおこなった。

重田は、エチオピア高地のエンセーテ栽培を中心とする独特の農耕文化の成立機構について、人とエンセーテとの相互関係という観点から分析したほか、遺伝子源供給地としての野生種自生地の儀礼的保護の重要性について指摘している。また、アフリカ起源の各種農作物の栽培化の歴史に関する検討をおこなった。

嶋田は、西アフリカにおける歴史地域構造について分析を試みたのち、大西洋を経由した交

易及び西欧による植民地化以前には、この地域の物流及び文化交流の中心は北部のスーダン地域であったこと、そしてこの地域は、アフロ・ユーラシアの乾燥地帯を結ぶかつての大交易網の辺縁部に位置していることを指摘した。これから、西洋による近代世界システムの形成以前には世界的な交易システムは存在しなかったとするウォーラーシュタイン等の説を批判し、近代以前にすでに上記のような内陸乾燥地帯、及びインド洋等を結ぶ世界的な交易システムが存在していたこと、そして、こうしたシステムが西欧による近代世界システムによって破壊されたということを指摘した。嶋田はさらに進んで、近代への移行期には、ヨーロッパも中国も、また日本もフロンティアの開発という共通の問題を抱えており、そのような面からアジアやアフリカ、ヨーロッパの歴史の地域間比較をおこなう必要があるとしている。

嶋田はまた、ニジェール川沿いの内陸デルタの乾燥化がこの地域の社会及び文化にどのような影響を及ぼしたかについても検討している。

4. 研究の成果とフロンティア

上記の研究活動の項にあげたように、平成8年度は個々の地域における生態史の検討を主におこなったが、その結果、次のような点が明らかにされた。

まず、アフリカの歴史の理解にあたっては、とくに生態環境と人間活動の相互作用に関する理解が不可欠である。このことは、人間の文化や社会のあり方に生態的な環境の影響を読みとることと同時に、生態環境のなかにも人間活動の足跡を読むことを意味する。アフリカの多くの地域で近年、原生的な自然の破壊や変容が急速に進んでいるが、環境に対する人為の影響は先史時代にも遡ることができるのである。ただし、そのような歴史的な人為の影響はアフリカの環境にとっては決して壊滅的なものではなかった点に注意する必要がある。たとえばコンゴ盆地のイトウリの森などの地域では、そうした相互作用を通じて、地域の生態環境が人間にとってより住みやすくなってきたという例も存在する。

また、アフリカの地域区分に関しては、従来から同心円状に展開する生態ゾーンとそれぞれのゾーンで繰り返されている特徴的な生活様式の存在が強調されてきた。アフリカが「同心円の大陸」と形容されるゆえんであるが、最近の先史生態学及び歴史生態学的な研究によれば、むしろ、アフリカの環境は、先史以来何度も乾燥化と湿潤化を繰り返してきたことが明らかにされている。そのような環境変動との関連において、アフリカにおける農耕起源や生業変化、人口移動、王国の形成や衰退、交易活動の分布と消長などの生態史的な現象を検討する必要がある。すなわち、アフリカにおいては、歴史の舞台である生態基盤は決して不変・不動のもの

ではなく、自然的、人為的な要因によって変動してきたのであり、アフリカにおける歴史のあゆみは、こうした環境変動と関連させながら検討する必要がある。いいかえればアフリカでは、地域性の基盤であり、歴史記述の単位ともなりうるような固定した地域単位の設定が困難という事情が存在する。

また、アフリカでは、かりに生態的な区分が可能であったとしても、これまでに人間や文化がそれを越えて頻繁に移動してきた。その端的な例を、紀元前1千年紀から約1000～1500年の間に西アフリカから東アフリカまで、直線距離にして4000キロメートルもの距離を移動したバントゥー系住民の拡散にみることができる。現在では、サハラ以南のアフリカの広大な地域に分布するバントゥー系住民は、半砂漠からサバンナ、疎開林、熱帯雨林、スワンプ、高地ときわめて多様な生態系にわたって分布し、その生業もサバンナ型の雑穀栽培農耕から、森林型の根菜栽培農耕、牧畜、漁撈、狩猟と、きわめて多岐にわたっている。また政治組織も、村落単位の離散的な生活を営むグループから首長国を形成したグループまで、変異が大きい。それにもかかわらず、これらのバントゥー系住民は、互いにきわめて近縁な言語を話し、超自然的な存在をめぐる観念など、文化的に多くの特徴を共有する人びとである。

以上のような事情を考えれば、固定的な生態区分を設定し、それにもとづいた静態的な地域単位を考えることが、アフリカの地域性を理解するのにどこまで有効であるかは疑問である。

このような問題点を認識した上で、それでもあえてサハラ以南のいわゆる黒アフリカの地域区分を試みるならば、以下のような区分が可能かも知れない。第1は、西アフリカのいわゆるスーダン・サヘルを中心とした地域で、ここはアフリカ独自の雑穀農耕文化の起源地であるとともに、有史以来、サハラ横断交易などを通じて絶えず北のアラブ世界や地中海地域と接触があった地域である。ここには地域の農業や鉱物資源、そしてサハラの南北を結ぶ交易を背景にして、古代ガーナ帝国をはじめ、マリ、ソンガイ、カネム・ボルノなどの帝国が相次いで誕生した。第2は、東アフリカ沿岸部で、ここはやはり古くからインド洋の海域ネットワークを通して中東や東南アジア諸地域、さらには遠く中国などとも結ばれていた地域である。周知のようにこの海域ネットワークは、大航海時代とそれにつづく西欧列強によるアジア・アフリカの植民地化の時代には著しくダメージを受けることになったが、歴史的には、アジア起源の作物の伝播などを通じて、アフリカの歴史にさまざまなインパクトを与えてきた。最近では、西欧支配によって分断されてきたアジアとアフリカが西欧を経由しない新しい関係を模索しつつあるが、両者の交流が実は歴史的な深みをもつことを認識する必要がある。最後に、これらのアフリカ大陸の辺縁部に囲まれた広大な内陸部を第3の地域として考えることができよう。この

地域は、比較的最近まで王国などの大規模な政体形成がみられず、小世界が林立していた空間である。西欧による植民地支配や西欧文明の影響もいちばん最後に訪れた。それだけに、アフリカの固有文化がもっとも色濃く残る地域であり、いわば地域研究の方法論がもっとも有効な地域といってよい。

本年度の成果としては、これらのほかに方法論的な側面もあげられる。従来の地域研究においては、現地調査による事象の観察と文献研究との統合が試みられてきたが、本研究では、これらに加えて、人工衛星による画像データの解析を利用する方法が試みられた。現場でのミクロな人間活動の観察と衛星などによるマクロな環境把握を結合する方法は、とくに地域の生態史を解析するのに有効であろう。

5. 今後の課題

今後の課題としては、これまで研究者が個別に検討してきた地域の生態史を相互に比較対照させることである。また、そうした作業を通して、生態史という観点からみたアフリカの諸地域の特徴を把握することである。

さらに、そうした成果に基づいて、他地域とくに東南アジア等の例と比較検討し、アフリカの地域としての特徴を抽出することであろう。高谷は世界単位を「生態が卓越する地域」、「ネットワーク型の地域」、「文明の支配的な地域」に分けている。この分類にしたがえば、内陸アフリカは「生態が卓越する地域」ということになるが、ここでは東南アジアとは異なり、必ずしも生態環境に応じた固有の文化が見られるわけではない。パントゥー系住民についてみると、きわめて異なった生態環境に、きわめてよく似た文化をもつ人びとが生活する。その一方で、同様な生態環境の中にさまざまな文化的背景を有する人びとが共存しているのが、この地域の実情である。このようなアフリカの実態を把握するには、静態的で同質的な地域区分を設けるよりも、「変動」「移動」「異質性」「流動」などの側面から検討を加えることが有効ではないだろうか。

また、地域区分が大なり小なり「数の論理」にもとづいておこなわれているという点にもあらためて検討すべき問題がある。ひとまとめにくくられた「地域」の中に「異質」な部分が存在しても、それが取るに足らない人口の場合には無視されがちである。大局観を得るためにはそうせざるを得ないという事情はわからないでもないが、しかし、何のために地域区分を試みるのか。世界の諸地域が「西欧合理主義」あるいは「資本主義」という単一の原理で統合され支配されようとしている。それはけしからん、世界のさまざまな地域にさまざまな個性的な価

値を認めようというのが、そもそもこうした地域区分の趣旨ではなかったか。それならばたとえば、人口規模からみて取るに足らないような小さな社会でも、それが固有なものであるかぎり、認めていかなければならないであろう。

さらに、本研究ではランドサットなどの衛星データを用いた地域分析の方法を試みたが、このような新しい方法をさらに広く、地域の社会や歴史の理解に活用することも今後の課題であろう。

6. メンバーの研究業績（平成8年度発表分）

市川光雄

「根源的世界としての森」山田 勇編『森と人の対話』人文書院, 1996.

「内陸アフリカの論理：生態史的背景」『重点領域研究：総合的地域研究成果報告書シリーズ』

No. 22: 45-52, 1996.

"The Co-existence of Man and Forest in the Central African Rain Forest." In: (Ellen, R. and K. Fukui, eds.)

Redefining Nature: Cognition, Ecology and Domestication. Berg Publishers, pp.467-492, 1996.

"Mbuti Pygmies." In: (Lee, R. B., and R. Daly, eds.). *Encyclopedia of Hunter Gatherers*. Cambridge

University Press (in press).

"A Preliminary Study of Historical Ecology in the Ituri Forest of Zaire." *Proceedings of the Colloquium on the Hunter-gatherers in Equatorial Africa*, Leiden (in press).

"Problems in the Study of Ecological Anthropology in Central Africa". *African Study Monographs*, Supplementary Issue, No.25 (in press).

荒木 茂

「土と焼畑の自然誌」田中・掛谷・市川・太田編『続・自然社会の人類学』アカデミア出版会, 1996.

太田 至

「規則と折衝」田中・掛谷・市川・太田編『続・自然社会の人類学』アカデミア出版会, 1996.

「ナミビア北西部のカオコランドに住むヘレロとヒンバのエスニック・バウンダリーの動態」『アフリカ研究』第43: 115-131, 1996.

嶋田義仁

「西アフリカの地域構造と世界」『重点領域研究：総合的地域研究成果報告書シリーズ』NO. 22: 22-35, 1996.

Djenne morte - Le delta interieur du Niger et ses problems de la secheresse. Special Publication No.28,

March 1997. Research Center for Regional Geography, Hiroshima University, 1996.